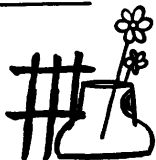


## 巻頭言



### ひらかれた情報処理学会への試み

竹井 大輔†



本学会も本年で創立 30 周年を迎え、会員数も 3 万 2 千名に達するまでになった。昨今の情報処理分野の発展を反映して、この分野にかかわる人達も急速に増加し、その所属する箇所も、多岐にわたっている。

会員の構成比で見ると、大学、研究所とそれ以外の企業等との比は 3 : 7 で産業界に属する会員が多いがそのうちでソフトハウス、ユーザに属する会員は少数派である。一方、実社会においては、数千社のソフトハウスとそれを超える数のユーザの技術者が日夜努力しており、多数派といえよう。しかし、これらの層から、学会はわかりにくい、役に立たない、関係がない、等の声が多い。学会には高い頂きが必要ではないが、それを保つためにも広い裾野が必要である。

これらの層が学会と関係が薄いということは、残念なことである。今後ますます多様化する分野をカバーするためにも学会として新たな改善の努力が必要である。

それらを含めて、学会ではいろいろな改善への試みが行われようとしている。

まず、学会活動の大きな柱の一つである学会誌については、特に産業界の第一線の会員から、分かりにくい、読みにくいという声が多かった。

もちろん、学会誌としての水準は保っていかなければならないが、他方では、広がりゆく会員層を広くカバーするための、わかりやすさ、読みやすさが必要である。今般、本誌 3 月号本欄の「学会誌改善宣言」に示されたように、これらの要望がかなり実現されることになったことは、喜ばしいことである。今度は、会員側から積極的に意見等を出して、この改善をより実のあるものにしていく努力が望まれるところである。

一方、学会活動のもう一つの大きな柱である研究会活動については、現在 21 の研究会に延べ 10,000 人の会員が登録され活動を続けており、関係者の努力により、その開催回数、発表件数も前年を上回る実績を示

している。また、研究会活動の活性化のために、昨年からは研究グループ制と小規模国際会議制度が導入され、より容易に、より自由に関心あるテーマについて活動ができるようになった。

しかし、この研究会活動に参画している前述の層の会員の数は一部の研究会を除いて、いささか少ない。もちろん、各研究会によって、会員の構成はそれぞれ異なるだろうが、やはり、当該の層の会員の関心をひく部門が少ないのか、あるいは会員の関心が薄いのか等、大いに気になるところである。

これら分野の会員が日頃、タッチしている課題、苦勞している事柄から新たな実学的なテーマを探り出し、掘り下げていくことは可能であろう。一方、各研究会が取り組んできた貴重な研究成果を広く活用して、最新の技術や共通的なテーマについての、横断的なセミナーやチュートリアル等、開かれた活動も進めていくべき課題であり、これらの具体的な推進法について検討を進めているところである。

さらに、近年、情報技術の進展にともないその標準化の活動が世界的に活発化している。情報技術の規格の制定については、我が国が経済大国、技術大国としてその力を発揮することを期待される場合が多くなっている。このため当学会の情報規格調査会を中心に、会員各層からの協力、支援を得て規格作成等を推進しているが、この面からのユーザ会員の参画は一部の大手ユーザを除いては、いささか手薄である。

しかし、昨今ユーザとしての活動分野がより重要な意味を持ってきつつあり、使い手としての要望を反映させていくことがより強く望まれている。

以上のように、各部門で新しい試みが行われつつあるが、いずれもまだ緒についたばかりである。今後の進捗を見ながら、いろいろな意見が出てくることを期待している。学会の活動の源はボランティアであり、学会を動かしていくのは会員自身である。それぞれの立場で参画し、活性化のために協力をお願いしたい。

(平成 2 年 8 月 14 日)

† 本会理事 鉄道情報システム(株)